
SHADOW KINGS ~ pspo2i

RED PEPPER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H A D O W K I N G S \ p s p o z i

【Nコード】

N 8 7 3 2 X

【作者名】

R E D P E P P E R

【あらすじ】

『SEED事変』より数年後。

資源枯渇問題が深刻になっていくなか、モトウブでは『ドン・タイラー』が台頭。

無法者どもの巢に完全なる秩序を築き上げていた。

だがその数カ月後、その秩序は崩壊する。

かつてモトウブを支配していた6人の首領たちの一味が独立を宣言。シマを巡る闘争が始まった。

総裁政府は秩序維持のため、この事実を隠蔽。

同盟軍を用いて鎮圧に乗り出すも、戦線は難航していた…。

（オリジナルキャラ中心です。）

1 少女誘拐（前書き）

ある程度原作を知ってないと、意味分からんかもしれません。

原作知ってても意味分からんかも（笑）

1 少女誘拐

話をしよう。

モトウブを支配するローグスのトップ、
アルフォート・タイラー。

この男を知らない人間はいないだろう。

しかし、あまり知られていないが、彼に反旗を翻した者達がいることをご存じだろうか。

かつてモトウブを支配した6人のローグス達の、跡を継ぐ者として名乗りをあげた猛者たち。

そのなかの一人の名前をアスラン。

彼はまさにローグスだった。

弱い者から絞り取り、強き者にはひれ伏す、器の小さい男だった。

これは、そんな泥臭い男の話だ。

まあ、適当に流してくれていいんじゃないかな。

風に乗って流れてくるのは、灰色の砂と埃と、死の臭い。
ここは、地上の地獄だった。

「この俺が直々に出向いてやったのに、まだ払えねえなんてぬかすのか…？」

最も死人の出る街として有名な、バラスシティ。
その寂れた商店街の一角に、その男はいた。

「これ以上待てねえってんだよ…」

「も、もう少しだけ…」

「今すぐ払えねえってんなら…」
灰色と黒の髪の毛のメッシュが目立つこの男、アスランは、老人に向かってダガーをつきつけた。

「スジ通してもらおうか」

「スジ…？」

「これ、貸してやるからよ」

アスランの口の端が、ゆっくりと持ち上がる。

「指一本落とせ」

「あ、ああ…」

老人の目から、ぼろぼろ涙がこぼれた。

「う、ご勘弁を…」

「俺様のダガー、貸してやるって言ってたぜ？」

弱者が逆らうことなど許されない、男の冷徹な目。

「嬉しくって涙が出るだろ？」

「や、止めてください…。」

「ほら、早くやれよ」

アスランは老人の手を掴むと、それにダガーを押し当てた。

「ごうだ、ごう。なんなら、やってやるつか？」

「お許してください！中には娘がいるんです…！」

振り上げられた刃に対し、老人はただただ頭を下げるばかりだった。

「へえ、娘かあ」

アスランは彼の頭を掴み、ぐいっと持ち上げる。

「そいつ連れて来いよ」

「は…いえ！そ、それは…」

「連れて来いってんだよお！」

「へえ、カワイイ嬢さんだなあ」

店の奥から外に出てきた少女を見て、アスランは口笛を吹く。

「俺が買ってやるよ。いくらだ？」

真つ赤な赤髪のその少女は、声一つ出さずに小さく震えだした。

「こ、困ります！」

「うるせえ！」

アスランが腕を一振りすると、老人はなすすべなく地面に叩き付けられる。

「おじいちゃん！」

少女の叫び声に応えられず、ただうめき声をあげる老人。駆け寄ろうとした彼女の体を、彼はあっさり抱えあげた。

「返してほしかったら…」

悲鳴をあげて暴れる彼女をものともせず、アスランは言い放った。

「とつとつとシヨバ代を払うこつた。今までのツケ全部、耳をそろえてな…」

「は、はなして…！」

停めてあった車に彼女を放り込むと、アスランも運転席に乗り込む。

哀れな老人が顔を上げたところには、なにもかもがなくなった後だった。

「リ、リエラ……!!」

「い、いやあ！はなしてえ！」

もがく少女を抱えたまま部屋に入ったアスランは、彼女をそのままベッドに放りなげた。

「な、何をするの?!」

「あ?…何もしねえよ」

アスランはけだるい目で少女をいちべつする。

「妙な想像すんじゃないねえよ。やらしいな」

「…な、なにを言ってるの!!」

からかわれたせいもあり、彼女の顔は真っ赤になった。

「あんな酷いことしておいて！おじいちゃんを…」

「うつせえんだよ。ぐだぐだうるせえと、犯すぞ」

アスランの視線に怯み、少女は口をつぐんだ。

「てめえの大事なもんはてめえで守るのが男だろうが。涙流して責任から逃れようなんざ、ただのクズさ」

アスランは一旦言葉を切ると、少女から視線をそらす。

「俺はクズに優しくする性分は、持ち合わせちゃいないんでね」

呆然としていた少女は、扉が閉まる大きな音に我に帰った。

彼女は自分がかかるまっっているのが毛布だと分かると、それにすがりついて泣いた。

この街にはかつて、巨大な地下街が存在していた。

彼らアスランとその部下は、その廃墟を根城に警察から身を隠していた。

「連れてきた女の子は誰？」

「借金の担保だよ」

「ふうん……」

錆びついた汚い部屋にはアスランと、キャスケットを被った少年が椅子に座っていた。ちなみに彼の呼び名はキャスケット。見たまんまである。

「どうでもいいけど、ここが軍に気付かれたみたいだよ」

「…なんだと？」

アスランは顔色を変えた。

「軍って、同盟軍か？」

「他に何があんの？」

あつげらかんとしているキャスケットに対し、アスランは滑稽なほどうろたえていた。

「や、やべえぞ……」

「大丈夫だよ」

「何が大丈夫だよ、説明しろ！」

「治外法権って知ってる？」

少年の言葉に、ぴくりとするアスラン。

「例えば国際機関でも、他国の政治にはむやみに干渉できないってやつ」

「……知ってるさ」

アスランは鼻を鳴らす。

キャスケットは呆れたように肩をすくめる。

「あんた、やってることはセコいから、国際指名手配はされてないだろ？鎮圧作戦の標的にはならないよ」

「……だが、もしもってこともあるだろう。用心に越したことはねえ」

「あんたは用心すぎだと思っけどね、さっきの慌てっぷり」

「なんか言ったか、チビ帽子」

拳を握ってゆっくり立ち上がったアスランを見て、キャスケットは

片方の眉をあげて見せる。

「後悔するよ」

「ああ？」

「知りたいでしょ？ぼくたちを売った裏切り者」

少年の言葉に彼は舌うちし、椅子に座りなおす。

「聞かせる」

アスランの目には殺気が溢れる。

「そいつには、是非直接お礼がしたいもんだ」

2裏切り

バラスシティの地下には地下街のほかに、かつて国の要人が防空壕に使ったとされる広大なスペースが広がっている。

地下街よりもさらに地中にあるここでは、日夜問わず、金持ち連中が飽く無き死のサーカスに興じていた。

地下闘技場、通称デスパレード。

何らかの理由で日の当たる場所を歩けなくなったゴロツキどもが殺しあう、趣味のいい見世物だ。

地下数百メートルへと続く採掘用エレベーターに乗り込んで2時間。

アスランは心地よい揺れを楽しんでいた。

「…じゅぷっ」

喉元まででかかった酸っぱいやつを呑み込み、彼は手すりにもたれたまま舌うちする。

「…ちっ。最高の気分だぜ」

円形の舞台を見上げる形で取り囲むのは、血に飢えた観客たち。

正確には古今東西の有力為政者、貴族、商人、ギャングの幹部など、その扉は広く開かれている。顔を見られたくないやんごとなき身分のなかには、仮面をつけている者もいた。

そこから少し離れた特別席のうちの一つに、ある男が座っていた。名をサーフェイス。

アスランからここを任されている、ヒューマンの男だった。黒のスーツにループタイ、ひよろりとして背が高く、紺色の短髪に紺色の瞳を持つ、独特の雰囲気な男だ。

アスランは背後に7人ほど部下を連れ、男に大股で歩み寄る。

「やあ、アスラン」

彼に気付くと、サーフェイスは両腕を広げてみせた。

「君の闘技場はよく繁盛してるよ。まあ、いいんじゃないかな」

「そいつは何よりだ」

アスランは無表情にそう言った。

サーフェイスは椅子から立ち上がり、両者は近くない距離で向かいあって対峙する。

彼は微笑しながら言った。

「何の用かな。君が直接来るとは」

「分かっているはずだが、モヤシ野郎」

アスランが指を鳴らすと、背後の部下たちが一斉にハンドガンを構える。

「ここで殺してもいいが、てめえは見せしめにすることにした。」

アスラン自身も銃を取りだし、片手でサーフェイスに狙いをつける。
「俺を売った罪、死んで償え」

彼の言葉には、一切の酌量の余地がなかった。
にも関わらず、サーフェイスは相変わらず微笑を浮かべたままだ。

「私から君に3つほど、いいことを教えてあげよう」

「…あ？」

アスランの額に筋が浮き出た。

男は余裕の表情で、指を一本立てて見せる。

「まず1つ目。私を連れていくつもりのようながそいつは無理だ」

「…あんた」

アスランは怒るを通り越して呆れてしまったようだ。

「自分の状況、分かっているのか？」

「2つ目。」

二本目の指が立てられる。

「人の罪というのは、死んでも償えるものじゃない。私はむしろ、君を裏切った罪は一生背負って生きていく所存だ」

「笑えねーな」

「3つ目」

突然アスランは、背後に殺気を感じて振り返る。

そこにはセイバーをふりかぶる、部下たちの姿があった。銃を持った者たちも、完全にアスランを照準に捉えている。

「人は裏切る。金によってね」

「…！」

キャスケットは一人、アジトである地下街を歩いていた。

「眠い…！」

彼は目をしばたたかせた。

つい一時間前まで仮眠をとっていたのだが、アスランの部下から報告を受けたのだ。

「赤髪の少女が逃げた」と。

「なんで捜索に、僕まで駆り出されなきゃならないんだよ。まったく…」

キャスケットはうんざりした様子で、人気のない通りを歩きまわる。

「だいたいここは広すぎるんだ。道に迷ったら最後、一生出てこられないってのに…」

独り言をグチりながら次の角を曲がったそのとき。

「やあああああー!!」

けたたましい叫び声とともに、赤髪の少女が襲いかかってきた。

「うわっ!」

頭めがけて振りおろされた鉄パイプを、すんでのところで体を反らしてかわすキャスケット。

「わわっ、ちょ、待っ!」

彼は悲鳴をあげながら、めっちゃめっちゃに振り回される鉄パイプを避け続ける。

「いい加減に…しろって!」

大振りな少女のスイングの隙をつき、手首を捕まえ、鉄パイプを蹴りあげた。

宙を舞う彼女の得物。

「…は、放して!」

暴れる少女の手首をねじり、地面に押さえ込むキャスケット。

「悪く思わないでね。あいつの命令なんだ」

彼がほっと息をついたとき、彼の背後から人影が現れた。

「…ふざけやがって、このアマ…」

「あ…!」

赤髪の少女がはっと目を見張るのを見て、キャスケットも振り返る。

そこには頭をおさえて立っている、チンピラの姿があった。彼と同じで、少女探しに駆りだされていたのだろう。

「キャスケット、そいつを抑えてろ。おれが教育してやる…！」

男が近付いてくるのを見て、キャスケットはなにをしようとしてるのかを悟った。

「…！待ってよ！」

「うるせえ！」

チンピラは興奮し、話の通じる雰囲気ではない。

「殴られた借りは、体で払ってもらうんだよ…！」

しかし、それが叶うことはなかった。

宙を舞っていたパイプが落下し、チンピラの頭に一撃を与えたのだ。

「がっ…！」

白眼を向き、崩れおちる男。

キャスケットと少女は、呆然とそれを見つめるしかなかった。

「……………」

そして、全てがしいんと静まりかえった。

「知らないって…！」

2 裏切り（後書き）

このたびは妙なモノをお読みいただき、誠にありがとうございます。

2次創作と銘うっているものの、ほとんど原型を留めていない（笑）

タイラーとか早く出てこーい！

基本用語辞典(1) (前書き)

原作未プレイのかたへ参考程度に、用語集を作ってみました。

あまり使えないかもしれませんが(笑)

基本用語辞典(1)

『総裁政府(総裁府?)』

1. 太陽系全ての政府を束ねる国際機関。同盟軍の総指揮決定権を持つ。らしい。
しかし原作では空気!

2. 1795年10月、フランスに成立した共和政府。
政権は安定せず、しだいに軍部の発言権が強化され、ナポレオン台頭の引き金となった。

『同盟軍』

なんかメカメカした人たちで構成された軍事組織。

『キャスト』

1. 奴隷として造られたが反乱を起こし、種族として独立した、メカメカした人たち。
ガンダムみたいな風体もいれば、ヒトそっくりな方もいる。

2. ドラマなどの出演者。
キムタクって演技上手ですね。チョットマーティヨ!

『ローグス』

ならず者の総称。ギャング。

『モトウブ』

3惑星のうち、最も資源に恵まれた国。
過酷な自然環境に、はびこるチンピラで有名。

『シャブ』

一般的に、麻薬を指す。
精神的快楽や性的興奮の持続など、効果は様々。
よい子は触らないほうが無難。

『ファンタシースターポータブル2インフィニティ』

その恐ろしいほどのキャラクタークリエイティブの自由さから、中二、
変態などの猛者が集まるPSPゲームソフト。
インターネットマルチモード対応。

ワイナールの頭の筒っぷりは一見の価値あり。

3 不意打ち

「ぐっ！」

男の撃ったフォトンの弾丸が、アスランの肩をかすめる。

「クソがあ！」

アスランは悪態をつくつと、低い体勢からの蹴りでその男の顎を打ち砕いた。

かんぱつ入れずに、背後から無言で彼に迫る、二本のセイバー。

頭と足を狙つて振り抜かれたそれらの間をくぐりぬけるようにしてかわすと、アスランは彼らの無防備な背中をダガーで切り裂いた。

鮮血を巻き散らし、崩れる二人。

彼はそのうちの一人からセイバーを奪うと、まさに銃を撃とうとしていた敵に投げつけた。

一直線に飛んだそれは、敵の喉元に突き刺さる。

あっという間に、4人の男が血溜りに沈んだ。

「次はどいつだ？」

不敵に笑ってみせるアスラン。

そのとき、彼は横から発砲してくる3人の男たちに気付く。

身を翻し、テールブルの影に潜り込むと、セラミック製のそれは瞬く間に蜂の巣になった。

近くにいた人々は悲鳴をあげ、だがすぐに、それらは歓声や怒声に

変わる。

転がるようにテーブルから脱出したアスランは、瞬時に床から拾いあげた銃を連射し、3人の脳天に風穴を開けた。

「あとはてめえだけだ…」

サーフェイスにダガーを突きつけるアスラン。

彼の背後には、裏切った7人の部下が冷たくなっている。

「乱暴だな、君は。…まあいい」

サーフェイスは穏やかな笑みを浮かべた。

「それが君たちローグスだ」

「死ね」

アスランは素早く得物を振りかぶる。

そして、鮮血が舞った。

「ふうん。リエラって言うんだ」

キヤスケットは彼女の腕を掴んだまま、元来た道に戻っていた。

「かわいい名前じゃん」

「そ、そうかな」

「うん。だからさ…」

彼は脅えた様子で、リエラの握る鉄パイプを見る。

「その武器は捨ててくれない？」

「え？」

彼女は小首を傾げる。

「何のこと？」

「それだよ、そのパイプ！」

キャスケットは思わず声を荒げた。

「おっかないんだよ！せっかくかわいいのにさ。ね、頼むよ。僕は乱暴しないから」

また暴れられては困る。

しかし彼女は得物を手放す気配がなかった。

「わたし思っただけど…」

リエラは上目づかいに彼を見る。

「薔薇って、棘があるからこそキレイなんだと思うな」

「いや、意味分らないから！」

彼は再び少女のパイプを蹴りあげる。

「しかもキレイとか、自分で言っちゃうんだ！」

「…わたしを逃がして。お願い！」

「ハア？」

目を白黒させるキャスケット。

「わたし、ここが怖い！おじいちゃんのところに戻らせて！お願い…」

「あんたのほうがり怖いよ、ぼくは…」

そうツツコミながらも、彼はリエラの流す涙に心が揺れるのを感じていた。

しかし逃がすわけにはいかない。

「それはできないよ。ぼくも自分がかわいいからね」

どこの少女のために、指を切るはめにはなりたくなかった。

リエラは涙を溜めた目で彼を見ていたが、諦めたようにうなだれる。彼女のことを気の毒になるキャスケット。

「心配しないで。そこまで酷い目には…あわせられるかもしれないけど」

彼はリエラの背中をさする。

「でも、殺されはしないから。ぼくがかばってあげるよ。あいつらの弱みは全部知ってるし…?」

キャスケットは途中で言葉をとめた。

リエラが突然、彼の手首と袖口を掴んだのだ。

「なっ…?!」

顔をあげた彼女は、申し訳なさそうに笑った。

「…ごめんね」

言うが早いか、リエラは流れるような動作で体を入れかえ、彼の体を投げ飛ばす。

近くの壁に叩き付けられたキャスケットは、悲鳴をあげる暇もなくのびてしまった。

「…さてと」

リエラは涼しい顔で辺りを見渡す。

「出口はどこなんだろう？」

4 無差別殺人（前書き）

お時間があれば、どうぞ。

ローグスが主役の話ですが、タイラーさんさえ出てくる気配がないですね（笑）

4 無差別殺人

アスランは目の前の光景に驚愕した。

フォトンの刃の餌食になったのは、そこらにいた野次馬の一人、中年の男だったのだ。

「くそ、なんだコイツ」

アスランは突然サーフェイスをかばった男の遺体を横に蹴り飛ばす。

「邪魔だ！」

「ほら、どうしたんだい」

悠然と手招きするサーフェイス。

「ここだ、アスラン」

「なめやがって…」

今度こそとばかりにとびかかるアスラン。

だが、今度も彼のダガーは男に届かなかった。

「…なっ…！」

割って入った名も無き女性を刺し貫く、アスランのダガー。

アスランは無言で崩れ落ちる女性を信じられない目で見ている。

彼は動くこともできずに、呆然とサーフェイスを見つめる。

「混乱しているのか、アスラン？」

緋色の目が、面白そうに光る。

「それとも…、気付いてしまったのかな？」

「…」

アスランは無言にサーフェイスを睨みつける。

「まあ、いいんじゃないかな、どっちでも」

サーフェイスはキザに微笑んで見せた。

「君が無実の人間を9人殺したことに、変わりはないんだから」

「てめえ…」

アスランは拳が青くなるほど強く握り締める。

「くだらねえ小細工使いやがって」

「違う。小細工じゃあない」

サーフェイスは指を左右に振る。

「わたしの『力』だよ。レリクスで手に入れた、強大な力だ」

「解説はいらねえよ！」

アスランは得物を振りかぶり、サーフェイスの目前まで迫った。だが、止まった。

金縛りにあったかのように、動くことができないアスラン。

「…！」

冷や汗が額を流れ、目のなかに入る。

だが、まばたきひとつできない。

「駄目だ、アスラン。わたしの話を聞かないと」

サーフェイスは彼の目の前で指を左右に振った。

「読者をおいていってしまおう」

アスランは罵声を浴びせようとしたが、彼の口は全く動かせなかった。

「そう、わたしの力は、君たちの『今』を奪うことだ。」

アスランは体の自由を取り戻そうと、必死の抵抗を続ける。

「人数制限はあるが、複数の人間をコントロールすることができない」

サーフェイスはここまで言って口を閉じ、アスランを冷ややかな目で見つめる。

「金欲しさに裏切ったのは、わたし一人さ。君の7人の部下は、なにもしちやいない。わたしの操り人形だっただけさ」

その時、アスランの腕が突然動き、刃が鋭くサーフェイスの胸を斬り裂いた。

「おっと…なんてこった」

男は間一髪のところであわしたが、スーツが破れ、胸がはだける。

「君を縛るのは、どうやら難しいらしい。まあ、こんなスーツもセクシーでいいかな、アスラン？」

「ほざけえ！」

腰のホルダーからハンドガンを取りだし、銃口をサーフェイスに向け、吠えるアスラン。

「ナイフは鋭くなければならない。だが君のは、…身も蓋もないな」

サーフェイスはそうのたまうと、アスランを真っ直ぐ指でさす。

「そのままでは、いずれ大切なものを失うことになる」

アスランは迷いなく引き金を引いた。

だが、飛び出してきた人影がそれを受け止める。

今度は若い夫婦だった。

規格外の威力をもつ彼のハンドガンに撃たれた二人は、見るも無惨なバラバラ死体となる。

「無駄だよ。ここの人間たちはみな、わたしの玩具さ」

サーフェイスは内ポケットから何かを取り出す。

それは紫の光を放つセイバーだった。

「無論、君もね」

早朝のバラスシティは、生臭い霧に包まれている。街外れの下水道施設の側には、キャストやマシナリーの一団があった。

各々の肩には三国の連合国旗。同盟軍だった。

「隊長、隊長！」

朱色のカラーリングが鮮やかなマシナリー、カニ・パンが声を出す。多脚型マシナリーの一種で、蟹を模したそのボディには、細長い足がいくつか生えていた。

「なんだい、カニ・パン」

何の冗談なのか、頭にパイロンを被ったキャスト、パイソンが難儀そうに返事する。

「こつちに味方するローグスって、一体どんなやつなんでしょ？」

「さあねえ」

パイソンは肩をすくめる。

「金欲しさに仲間を裏切るやつだ。きつと極悪面だわさ」

「そうでしょうかねえ？」

カニ・パンは疑わしそうに、そのぎよろぎよろした目を動かす。

「正義な同盟軍に味方するんだから、きつと善良な面ですよ」

「いいや、悪い顔だね。眉毛とかなかったり、組んだ膝の上で黒猫撫でてたり、マイク持つとき小指立てたり……」

「良い面ですよ。熱唱してるときの松田聖子なみですよ」

「あんなブタ面のどこがいい面……。つーか、古いよ」

雑談に花を咲かせる二体。

そのとき、彼らの背後から部隊の指揮官が歩み寄る。

四角い大きな頭が特徴のキャスト、ゼフティスだ。

「おまえたち、やかましいぞ」

「は、はい！申し訳ありません」

「先行兵が突入してから30分が経過、連絡が途絶えた」

ゼフティスの発光する蒼い目は、緊迫した雰囲気語っていた。

「突入するぞ！地下街へ。ローグスを殲滅するのだ」

5 公務執行妨害

「がはっ！」

アスランの体が宙を舞い、床に叩き付けられた。彼を蹴りあげたサーフェイスは、ヒュッと口笛を吹く。

「口ほどにもないな、首領」

「ぬかせえ…！」

そう吠えたものの、今の彼には先程の覇気がなかった。息も絶えだえに起き上がるつとするアスランの首筋に、セイバーをつきつけるサーフェイス。

「っ…！」

「君の相手は飽きた」

サーフェイスは、コキコキと首をまわす。

「だからゲームをしよう」

「なに…？」

「舞台を用意する」

サーフェイスはそう言ってセイバーを納め、アスランに背を向けて

歩いていく。
アスランは床を見て気付いた。
ここは闘技場の舞台の上だ。

「ゲームだと…?」

彼が起き上がったとき、舞台に衝撃が走った。
舞台を取り囲む鉄針フェンスが、天井から落下したのだ。
サーフェイスはフェンスの外側で彼を眺めながら、審査員席のマイクを手にとった。

「…紳士淑女の諸君!」

サーフェイスの声に、会場はしんと静まりかえった。

「一つ、とっておきの試合を披露しよう」

舞台を取り巻く金持ちたちは好奇や脅え、怪訝な目を彼やアスランに向けていた。

「闘技場のオーナー、ドン・アスラン! 対するは…」

そう言っ指をパチンと弾くサーフェイス。

「今週一番の好カード、『蒼き右腕』!」

言い終わるが早いか、舞台の左端から煙が噴き出す。
そして現れたのは、右腕が蒼い鋼鉄の義手に包まれた青年だった。
「私は君の敗北に賭けよう」

サーフェイスはマイクを放り投げ、そう言った。

「君は君自身の勝利にかけたまえ」

「待て！逃げんなコラア！」

立ち去ろうとするサーフェイスに向かって怒鳴るアスラン。

しかしそれは観客の歓声によってかき消された。

振り返ったアスランは、自身に迫る蒼い拳を見た。

「があっ！」

フェンスに叩き付けられたアスランの体に、無数の針が突き刺さる。蒼き右腕は彼をフェンスから引きずり下ろすと、その腹部に拳を沈めた。

「……っ……」

力なくうなだれるアスランに容赦なく振るわれる、青年の拳。

彼の表情には、何の感情も見えてとれない。

無言で、ただひたすらに己の仕事をしていた。

とどめとばかりに繰り出された顔を狙った蹴りは、しかし、アスランの手の平に受け止められた。

「調子に乗るんじゃないやねえ……！」

彼の覇気ある声が響くや否や、

青年の体は舞台に叩き付けられた。

舞台に亀裂が走り、瓦礫の粒が舞う。

ふらふらする青年が見たものは、彼の脳天に迫るアスランの踵だった。

「うおらああー!!」

蒼き右腕は、成すすべもなくマウンドに沈む。
あつというまの決着だった。

観客たちは興奮に湧く。

彼らは両腕を突き上げ、叫び声をあげ、辺りは騒音の坩堝と化した。
アスランは自分のダガーナイフを拾い上げ、倒れたままの蒼き右腕
を冷徹な目で見下ろす。

額が割れ、血に濡れた彼の眠ったような顔は、改めて見ると幼かつ
た。

「…ぺっ」

アスランは血の混じった唾を吐くと、黙ってダガーを収めた。

「くそっ！絶対許さないぞ、あの女！」

キヤスケットは頭から湯気を出しながら、地下街を小走りに移動し
ていた。

「優しくしてあげたのに！」

苛立たしげに建物の扉を蹴り開けたとき、彼は一瞬凍りついた。
そこは惨劇だった。

飛び散った血痕に、壁に空いた無数の弾痕。

部屋にはローグスたちの死体がごろごろ転がっていた。

「そんな…」

キャスケットはとっさにコートのナノトランサーからハンドガンを取り出すと、物陰に身を潜ませて辺りを窺う。

「敵はどこだ…?」

そう呟くが早いか、隣の部屋への扉が突然大きく開いた。キャスケットははつと身をすくませる。

「あちこちにいますね〜チンピラ」

「ゴキブリだよ、ゴキブリ。一匹出たら、二十匹はいると思え」
現れたのは、変わったいでたちのマシンナリーとキャスト。

こっちに気付く様子もなく、側を通りすぎる。

キャスケットは目を細めて彼らを見ていた。

なんだろう?

あの実験室、変な形だな。

キャストの方も、なんでパイロン被ってるんだ?

彼は首を傾げたが、彼らの背中に刻まれた同盟軍のマークを見て愕然とした。

「こいつらがみんなを…!」

キャスケットは彼らがでていったのを確認すると、携帯端末を取り出す。

「ランディ！聞こえる?」

「聞こえるぞ、キャスケット」
キャスケットの通信を受け取ったのは、身長が2mは越える屈強な大男だった。

生物の頭蓋骨を模した盾を腕につけ、鮮やかな金髪を背中で結っている。

「どうした？」

『地下街に同盟軍が紛れ込んでるみたいなんだ！』

「そうらしいな」

ランディは頷く。

「お前に連絡を取ろうとしていたところだ。アスランにかけたんだが、繋がらない」

『そっちは大丈夫？』

「問題ない。心配するな」

彼はそう言ったあと、しばらく顎をなでていたが、やがて言った。

「お前は構わず逃げろ。相手はおそらく多勢だ」

『…分かった』

ランディは通話を切ると、足元に転がっている五人の同盟軍兵士を

眺めた。

どれも手足をあらぬ方向にねじまげられ、身動きができずにつめき声を上げている。

大男は得物のアックスを地面から引き抜き、呟いた。

「みんな無事だといいが…」

「ハツハツハ！ そうなんだよ、笑っちゃってさあ！」

通信機片手に笑いながら地下街を歩くのは、黒髪を長く垂らした男だった。

ピンクのホストYシャツに左右逆に履いたヘビメタブーツ。片手にはチャクラム型のダガーがぶら下がっている。

彼の呼び名はハスキー。由来は、たまにかなきり声をあげるからだそうである。

「物陰から突然撃ってきたんだよ！ ヤバイでしょ！」

『大丈夫なの？』

通話の相手はキャスケットだ。

「え〜別にいい？ ただスゲエびつくらしたからあ？」

男は後ろを振り返り、切り裂かれ、スタスタになっている兵士たちに目を向ける。

「グチャグチャにしちゃった！ ハハハ！ すげえんだよ、写メ贈ろ

つか？」

『いや、いいよ……。とにかく、地下街は棄てて、鉾山から地上に逃げろって』

「ありがとうさん！っていうか……」

へらへらしていたハスキーは、突然豹変して目を剥いた。

「さっきから何でタメなんだよ！敬語使えよ殺すぞクソガキイ！」

6 現場指導違反(前書き)

2話目の間違いを訂正しました。

フェアリー ヒューマン

全然違うじゃん！(笑)

6 現場指導違反

「イカレたヤツ…」

怒鳴り声が聞こえるや否や、キャスケットは通信を切った。

「あんなヤツ、心配する義理ないか…」

そう言つて通信機をポケットにしまったその時、低い声が辺りにこだました。

「動くな、小僧」

「っ!?!」

振り返ると、そこにはライフルを片手で構えたキャストが立っていた。

顔が四角くて大きい、一度見たら忘れられない顔だ。

「だれ…?」

「同盟軍大将、ゼフティス・スタイル」

男はそう名乗り、ライフルを彼の頭につきつけた。

「お前はローグスだな」

「なんでそう決めつけるのさ。民間人だったらどうするの?」

冷静なキャスケットに対し、ゼフティスは肩をすくめて見せる。

「お前のことは知っている。昨日、同盟軍のネットワークをハッキングしただろう」

「げ…」

「こちらの動きがバレたから、襲撃に備えていると思ったが…」
汗をかくキャスケットを難儀そうに眺めるゼフティス。

「買い被っていたようだな」

「どうだろうね。僕たちは抜け目がないから」

「フツ、強がるな、小僧」

男は鼻で笑った。

「武器を捨てる」

「…ふう」

キャスケットは溜め息を吐いてナノトランサーに手を沿え、ハンドガン二丁を地面に置いた。

「これで全部だよ」

「その帽子のなかのもだ」

「…うそ」

キャスケットは口をぱくぱく動かす。

「なんで分かったの…？」

「私を見くびるな。お前の手の内など読んでいる」

しばしの沈黙の後、少年はいたずらっぽい笑みを浮かべる。

「…へえ、そう？」

「私は寛容だ。ローグスは皆殺したが、子供は手にかけてたくはない」

彼の言葉に、キャスケットの顔が引き締まる。

「僕もローグスだ」

「分かっている。だから、取引をしたい」

ゼフティスはにこりともせず、銃口で彼のポケットを指した。

「アスランとその幹部連中に連絡を入れ、一ヶ所に集める」

「…そのあとは？」

少年の慎重な問いに、同盟軍大將は冷たく笑った。

「そのあと？そのあとなどない。お前の身の安全は保証されるだろう。仲間を誘導してくれさえすればいいんだ」

「僕がそんな薄情な人間に見える？」

「誰だって命は惜しい」

「確かに」

キヤスケツトは明るく笑った。

「でも、一生恨まれるのも嫌だな」

そう言うと、彼は地面に素早く伏せた。

ゼフティスの視界から標的が消えた瞬間、少年の低い体勢からの蹴りが彼のライフルを吹き飛ばす。

「…愚か者がっ!」

「僕はローグスが好きだ」

帽子に隠していたセイバーを突きこみながら、少年は乾いた笑みを浮かべた。

「同盟軍よりかは、いくらかね」

「あの世で後悔するがいい!」

ゼフティスは素早く身を捻って鋭い追撃をかわすと、脚部のナノトランサーに手をやり、両腕に二本のセイバーを握り締めた。

「我々に歯向かったことをな!」

「分かってないな、おっさん」

キヤスケツトは首を左右に振った。

「だからあんたに挑むんだ。後で自分を責めたくないから…」

アスランは蒼き右腕を肩に担ぎ、リングの外に出ていた。同盟軍が攻めてきたという報告があり、金持ち連中はちりぢりに逃げ出した。逃げないのは、死体だけだ。

アスラン自身が手にかけて人々の遺体のみが、がらんとした空間に累々と横たわっていた。

彼は無言でそのうちの一つに近づく。

それは若い女性だった。

腹部を貫かれ、白いワンピースは真っ赤に染まっている。

彼女の暗い瞳は淡々とアスランに訴えていた。

わたしはなぜ、死ななければならなかったのかと。

「…ちくしょう」

アスランは天井を見上げ、呟いた。

「おれが知るかよ…」

7 猥褻物陳列罪

「ゲハアア！！」

ハスキーの手からチャクラムが吹き飛び、彼自身もはるか後方まで飛ばされた。

「う、うわあああ…」

頭から流れ出る血におののき、彼はわめき声をあげる。

「無様だな」

ハスキーを見下ろしてそう呟くのは、スピアを握るキャストだ。白銀に輝くパルムの中世鎧を模したボディには、同盟軍のマークが刻まれていた。

「ははは…。参ったなあ、有り得ねーよ…。その白騎 物語な見た目といい、なんといい…」

ふらふらしながら立ち上がったハスキーは、乾いた声で笑った。

「…見逃してくんない？」

「愚問だ」

「ですよね」

ぎこちなく愛想笑いをするハスキー。

「それじゃあ、取引なんてどう？」

「取引？」

男の肩がぴくりと動く。

「首領の居場所を知っているのか？」

「いや、そりゃ知らねーんだけど…」

ハスキーが胸から取り出したのは、小さい何かだった。

「これやるよ、バブ」

「バブ？」

「んー？あんたバブ知らねーの？」

ハスキーはにやりと笑ってそれを左右に振って見せた。

「女を　せる大人のオモチャだよ。スイッチ押すと、ブルブルすんのよ」

「…」

「こいつは特別でな？あるクラブのお嬢とやったときに、使ったわけ…」

そのとき、男のスピアが素早く動いた。

「ああっ?!」

ハスキーの真ん前で、彼のバブが真つ二つになる。

「おれのバーー ブ!!」

「止まれー!止まらなければ撃つぞ!」

兵士たちの警告も聞かず、一心不乱に走る少女が一人。

短めの赤髪をなびかせ、息も絶え絶えに、錆と埃の舞う地下街を駆け抜けていた。

「…スタンモードで発砲開始!」

次々と放たれる弾丸を、路地裏に身を投げることでかわす少女。

「追え!路地に逃げ込んだぞ!」

背中ごしに聞こえる声に追われながら、リエラは額の汗を拭った。

「ハア、ハア…。どうしてここに同盟軍が…!」

「ヒイ、ヒイ…。ウゼエんだよね、お前…!さっきからどいつもこいつも…」

「…？」

さっきまでとハスキーのかもす雰囲気が変わったことに、警戒する鎧の男。

「さっきから頭が割れそうだしよ…」

ハスキーはがたがたと顎をならし、よだれを垂らし、目を剥き、手足はこまかに震えている。

「体は思うように動かねえし…。だいたい、てめえキモイんだよ、スカしやがって…！」

「…」

「っていつかさあ…」

ふらふらとポケットを探り、片っ端から入っているものを放り出すハスキー。息はますます荒くなる。

「てめえ、おれのバイ 壊したなあっ?!」

「…」

「ひい、はあ、はあ…！アレが切れてんだよあ…！お前、持ってねえのかよあ…！」

突如彼の体の輪郭が揺れ、みるみるうちに膨れ上がっていく。男は思わず息を飲んだ。

「…誰？」

それほど遠くない、むしろ、すぐ近くだ。

彼女は近くに落ちていた鉄パイプを拾い、慎重に足を運んだ。物陰から、そつと角の先を覗いたとき、リエラははっとした。

そこにいたのは壁に寄りかかったままくずれおちている、キャスケットだった。

胸には、セイバーによる大きな傷。

彼の半身は血にまみれ、口からは血が一すじ、顎を伝っていた。思わず駆け寄るリエラ。

「しっかりして！」

キャスケットは薄目をあけて彼女を見たが、その目は光を失いかけていた。

リエラは彼の傷を調べようとコートに手をかけたとき、背後でセイバーの稼働音がした。

「…！」

振り返ると、そこには同盟軍大将、ゼフティスが亡霊のように立っていた。

「見つけたぞ。赤髪の少女」

「わたしを…？」

「そっだ」

ゼフティスは溜め息を吐く。

「こんな地下まで、潜った甲斐があったな」

リエラはキャスケットに視線を移す。

「この子の手当てをさせて」

「必要ない」

ゼフテイスは無表情に言う。

「その小僧が己で選んだ道だ」

「放っておけない！」

リエラは叫んだ。自分に優しくしてくれた子だ。

「そのあと、あなたたちについて行く。約束するから！」

「必要ない。二度も言わせるな」

ゼフテイスはセイバーで彼を指す。

「どの道、ローグス供は皆殺しだ」

このとき、リエラの表情が驚愕の色に染まる。

「わたしのせい…？」

「フツ、勘がいいな。そのとおりだ」

大将は微笑を浮かべた。

「ここを潰す口実に、お前を使った。テロリストの娘が、ローグスにかくまわれている、とな」

リエラはがっくりと膝をついた。

ゼフティスはそれを見届けると、にやりと笑い、少女の肩を掴む。

「観念するがいい」

「…やだ」

「なに？」

ゼフティスははっとした。

自分の両手首が、彼女に掴まれたのだ。

「…わたしは貴方が思ってるほど、おしとやかじゃないの！」

彼女がそう言うが早いか、ゼフティスの体は宙を舞った。

「…ぐむっ！」

壁に叩き付けられるゼフティス。

だが、それだけに終わらない。

壁にみるみる亀裂が走り、あっという間に建物全体が崩壊する。

同盟軍大將は、瓦礫の山に消えた。

「ハア、ハア…！」

彼女は荒い息を整えると、キャスケットを抱えて逃げ出した。

8 タイマン

「…くっ！」

鎧のキャストはその長いスピアを地面に突き、荒い息をしていた。目の前には体液を滴らせた怪物が迫っている。逃げ出そうにも、粘性の高いやつはの体液が、彼の体を縛り付けていた。

「怪物め…」

「ギョオオオオオ！」

男の呟きに、大トカゲは身の毛もよだつ叫びで応えると、その体をグシャリと踏み潰した。

地下街の各地で、ローグスと同盟軍の抗争が勃発していた。

両者の間をフォトンの弾が飛び交い、怒声や悲鳴がこだまする。

兵士たちが通ったあとには、累々とローグスたちの死体が転がっているばかりである。

ある建物には、ローグスたちの恋人と、その子供たちがかくまわれていた。

だが彼らも、今では冷たい骸となり果てていた。

戦場のなかで、子供たちは何度両親の名を叫んだらうか。

その幼い叫びも、伸ばされた小さな手も、もはや届かない。

「どうしてここまでやるんだ…！」

子供の骸の一つを抱き、ランディは震えた。

「こんな子供たちまで…！」

「きやつ！」

飛んできた弾丸が足をかすめ、リエラは地面を転がった。放り出されたキャスケットも地面に落ち、うめき声をあげる。

「うっ…！」

リエラは足の痛みを無視して起き上がるうとした。

その地面についた手の、すぐ側に突き刺さるセイバー。

彼女は苦しそうに後ろを振り返った。

「いい加減あきらめろ」

ゼフティスは冷たい瞳で少女を見下ろす。

「私からは逃れられん」

彼女は近くに落ちていた鉄パイプを拾い、男に殴りかかった。

「やああああ！」

鉄パイプはゼフティスの頭に叩き付けられたが、彼はまったく堪えていない。

溜め息をついてそれを掴むと、ぐにゃりとねじまげた。

「身のほどを知れ」

ゼフティスが拳を後ろに引く。

リエラは成す術もなく、目をつむった。

そのとき、突如高い声が辺りに響く。

「伏せて！」

彼女はその声に反応し、素早く地面を転がる。

顔をあげると、ゼフティスの胸にセイバーが突きたてられていた。得物を投げたキャスケットは、再び地面に崩れる。

「…惜しかったな」

ゼフティスは、複雑な笑みを浮かべた。

「あと5cm深く刺されば、私の命をとれたものを」

男はセイバーを引き抜くと、地面に投げ捨てる。

リエラは少年をかばって、彼の前に立ちはだかった。ゼフティスは唸る。

「何故だ？」

「?」

「なぜ、名も知らぬ小僧をかばう？」

「そつちこそ」

リエラは怒りの声をあげる。

「名も知らぬ小僧に、どうしてここまでするの？」

「お前もあの戦乱の中にいたのなら分かるだろう」

ゼフティスは肩をすくめる。

「これは正義だ」

「わたしは、戦争なんて嫌い！」

そう叫ぶと、彼女は落ちていたセイバーを拾いあげ、構えた。その姿を見るや、ゼフティスは苦笑する。

「先ほどの柔術。あれは見事だったが」

刹那、光が煌めき、セイバーを弾きとばされるリエラ。

「セイバーの腕は、からつきしだな」

「っ……」

彼女は小さく悲鳴をあげ、手首を押さええてうずくまった。

「さあ、そろそろ決めてもらおう」

ゼフティスの背後には、いつの間にか5人の兵士が控えていて、彼らに長銃を向けている。

「降伏か。死か」

「…ごめんだね」

今にも消えいりそうな声と同時に、キャスケットがふらふらと起き上がる。

「あんたみたいな面白い顔の人に負けを認めたら、ローグスじゃないよ」

「しぶといな、幼いローグス」

同盟軍大将は片方の眉をあげる。

「死を選ぶか？」

「ただでは死なないよ」

キャスケットは震える手を左胸に押さえ付けるように当てた。すると、辺りにドクン、ドクンと、彼の心臓の鼓動が響きわたる。周囲に聞こえるはずのない人体の鼓動。

「これは…！」

「ナノブラストか！」

兵士たちに緊張が走る。
ゼフティスは眉を潜めた。

「そんな体で発動させる気が。死んでしまっぞ」

「言ったよね？タダでは死なないって」

キャスケットは痛みをしかめながら笑った。

「戦って死んでやる」

「バカなこと言わないで！」

リエラが悲鳴に近い声で叫ぶ。

振り向いたキャスケットの輪郭は、徐々に揺れはじめていた。

「君は一人で逃げて」

「ダメ…！」

「大事な人質なんだからさ」

キャスケットは同盟軍に向き直ると、精一杯声を張り上げた。

「覚悟しろよ！ぶつたおしてやる…！」

そのとき、リエラは見た。

彼の背後に素早く近づく誰かを。

「テメーがぶつたおれろ！」

輪郭が揺らんでいたキャスケットの頭を地面に叩き付けたのは、額に青筋を浮かべたアスランだった。

「なにが戦って死ぬだ！ かつこつけてんじゃねえぞ中二が！」

地面に沈み、伸びてしまったキャスケットをガクガク揺さぶるアスラン。

「テメーはローグスをなんだと思ってやがる！」

「や、やめてあげて！ 彼は重症だから…！」

「ちっ…」

彼は舌うちすると、キャスケットを放り出した。

輪郭が元に戻った少年は、薄い意識の中でアスランの背中を見た。

「何があってもしぶとく生き残るのがローグスだろ」

アスランは顔をしかめたまま呟いた。

「ここは、黙って俺に任せとけ」

「ドン・アスランか？」

両腕にセイバーを装備し、ゼフティスが問う。

「だったらどうなんだよ？」

「選ぶがいい」

ゼフティスの目はさっきとは違って変わり、殺気を帯びていた。

「今ここで死ぬか、独房で死ぬか」

「独房で死ぬ」

アスランは頭を掻きながら即答した。

「だから乱暴すんな」

「…理解した」

ゼフティスは頷く。

「では、武器を捨てる」

アスランは右手のダガーを投げ、地面に突き刺した。

「ほらよ」

「ホルダーのハンドガンもだ。そして、両手を上に上げる」

ゼフティスは目を細めてそう言う。

アスランはホルダーから銃を取りだし、そして、持ったまま、両手を上に上げた。

火を吹く彼の拳銃。

強力なフォトンの弾丸は天井に直撃し、直後、巨大なバルブが落下する。

ゼフティスが気付いたときには、彼の部下たちはそのバルブによって潰されていた。

「これでタイマンだな」

アスランはにやりと笑う。

「愚かな」

ゼフティスは首を左右に振る。

「その愚かさ。死をもって償え！」

「負けねえよ」

アスランはダガーを蹴りあげて左手に持つと、敵につきつけて構えた。

「後ろに誰かがいるときはな」

「ひええ〜〜！？」

カニパンはオーバーに悲鳴をあげた。

そこに倒れていたのは、手足がいかれ、最早動くこともままならぬゼフティスだった。

「たいしょ〜〜！！！」

「…やかましい」

大将は顔をしかめて呟いた。

「耳元でわめくな…」

「いててっ！」

地下街を抜けた先にある鉱山あとの洞窟で、アスランは悲鳴をあげていた。

「いてえんだよ、ボケ！」

「我慢してください」

リエラはわめく彼の肩に無理矢理包帯を巻き付ける。

「はいっ」

リエラはにっこり笑った。

「消毒も完ペキ。これで大丈夫ですよ」

「けっ」

そつぽを向くアスラン。

キャスケットはそれを見てむっとすると、彼の耳を引っ張った。

「ちゃんとお礼言えよ」

「でででっ！なんでだよ、別に頼んでねえぞ」

アスランの左耳はかつて千切れかけたことがあり、彼の弱点として定着している。

幹部クラスの間しか知らないが。

「いえ、いいんです。さっきは助けていただきましたし」

リエラは微笑んだ。

「意外と優しい方だったんですね」

「ばっ…」

滑稽なほどろたえるアスラン。

「べ、別に、テメー助けるつもりはなかったんだよ」

「じゃあ、キャスケットくんのために？」

彼女はふふつと小さく笑った。

「やっぱりいい人なんですね、アスランさん」

「いい人だとか、優しいだとか…」

アスランはうめき声をあげる。

「カタギになめられたら、ローグスはシマイだぜ…」

「リエラちゃんリエラちゃん！」

少し離れたところで、生き残った数十人の部下たちと一緒にいたハスキーが叫ぶ。

「こっちもお願ひい！」

「は、はい！」

リエラが返事をして彼らの方へ向かうのと、金髪の大男がこっちに
来るのは同時だった。

「ランディ、ケガは？」

キヤスケットの問いに、ランディは肩をすくめる。

「お前に比べたらたいしたことない」

キヤスケットは上半身包帯だらけの自分を見て、はにかむように笑った。

アスランは静かに虚空を見つめる。

「……一から出直しだな」

「ああ」

ランディはちらりとハスキーを見る。

「ハスキーは今、機嫌がいいのか？」

「アレを渡したから」

キヤスケットは肩をすくめる。

「さつき吸ってた。あと2日は大丈夫だよ」

「そりゃいい。ひとまずはな」

「長期的に考えると、問題は山積みだけど」

キヤスケットはアスランに視線を移す。

「あんたが生きててよかったよ」

「俺はそもも言つてられねえ」

アスランは険しい表情だった。

「あの野郎には、きっちり落とし前をつけさせる。必ずな」

「まあ、それもそうだけど」

少年は明るい微笑みを浮かべる。

「ありがとう。助けてくれてさ」

「けっ」

アスランは気だるげに頭をかいた。

「テメーは世話が焼けんだよ」

キャラクター紹介（前書き）

ここまで読んでくれたみなさまには、改めて感謝の意を表したいと思います。

あざーっす！

どうでもいいことですが、下の変な宣伝、なんとかありませんかね？
擬人化カレシとかエロ漫画とか、心底どーでもいいんだけど（笑）

キャラクター紹介

ageは年齢、heightは身長、weightは体重を表します。

念のため。

アスラン

(ビースト)

age:28

height:186

weight:68

独立を宣言した6人の首領の中で、最も小者と名高い(?)人物。女性への脅し文句に『犯すぞ』『姦すぞ』とよく言うが、実際はそんな度胸はない。

しかしスジを通すことにおいては一步も引かず、弱者であろうと容赦ない制裁を加える。

余談だが、過去に美容師を志していたことがあるらしく、髪型のセツトには毎朝2時間かけるらしい。

ファッションに関してもわりとミーハーである。

リエラ

(ビースト?)

age:17

height:162

weight:41

対人戦闘プログラムを学んでいるが、近接系武器の扱いはからっきし。

SEED事変の際、なにかしらの形で同盟軍やガーディアンズと敵対していたらしい。

人呼んで、鉄パイプ少女。

そのパイプはあらゆるフラグを粉碎する。

キヤスケツト

(ビースト)

age:15

height:163

weight:54

情報収集に秀でている少年。

手先が器用で美術的センスにも優れている。

本名は不明。

なにかしら頭に被っていることが多い。

アスランファミリーの幹部だが、強さはそうでもない。

恋愛自体に興味はないが、かわいい女子は好きらしい。

小柄で幼い顔立ちをしているので、その手のお姉さんにモテるようである。

サーフェイス

(ヒューマン)

age : 34

height : 186

weight : 60

アスランファミリー元幹部。

モデルはエル○ヤダイのルシ○エルで、序盤の語りもこの人。

レリクス潜入以降、独りごとが異常に多くなっただけだが、詳細は不明。

ちなみにサーフェイスは英語で『肌、表面』。意味不明。

ランディ

(ビースト)

age : 34

height : 206
weight : 95

仲間思いで思慮深く、幹部として申し分ない実力を備えた人物。
ダンディ。

意外にも端正な顔立ちをしている。

ガードイアンズに恋人がいるらしい。

そろそろ結婚してもいい時期である。

ハスキー

(ビースト)

age : 26
height : 176
weight : 64

薬物中毒者の男性。

本名はヒレル・スロバク。

そのトリップぶりは、ナノブラストに変異を及ぼすほど。

その強さはファミリー内でトップクラスだが、基本ヘタレである。

敵味方を区別せず、生かすも殺すも犯すも気分次第な自由人。

バランスシティの治安悪化に貢献しているようである。

ちなみに、週末はバンド仲間とつるみ、麻薬パーティーでキメるらしい。

アルフォート・タイラー

(ビースト)

age : 30 ~ 39

height : 180 ~ 190

weight : 70 ~ 80

伝説のローグス。

通称『ドン・タイラー』。

その信条は『侵さず、殺さず、貧しき者から奪わず』とかなり硬派。実質モトウブの統治者であり、カリスマ性と比類なき強さを併せ持つ。

おまけにイケメン。

この小説では、かつてタイラーファミリーと肩をならべていた『4大ファミリー』の後継者を名乗る6人が独立し、激しい抗争が始まっているという設定。

アスランを含めた独立派はタイラーを『偽善者』と呼び、強い者が弱い者を支配する『自由闘争』を掲げている。

ローグスはカタギを食い物にしてナンボ、というのが彼らの意見ら

しい。

ゼフティス・ステイル

(キャスト)

age : 76

height : 225

weight : 100

SEED事変を生き抜いた、同盟軍の古株。階級は大将。顔がデカイが、体もデカイ。

ローグス独立派鎮圧部隊の指揮官。わりと強いが、マガシやカーツほどではない。

カーツの指示を無視し、やりすぎる傾向が強い。

アーマーでガチガチに着太りしており、実際のボディは細身らしい。

パイソン

(キャスト)

age : 2

height : 150

weight : 30

名前の由来はリボルバー拳銃『パイソン』から。

実験的にある人物の戦闘データが組み込まれており、ハンドガンの扱いは同盟軍で一、二を争う実力を持つ。

しかし基本やられ役。

パイロンを被ったパイソン。
つまらない。

カニ・パン

(マシナリー)

age:1

height:140

weight:80

カニを模した多脚型指令塔マシナリー。

両腕の缺にランチャーを搭載している。

そしてよく喋る。

何故カニを模したのか。

それは開発者のみぞ知る。

大量生産型に、『カニ・カマ』というのもある。

鎧の男

(キャスト)

age : 21

height : 194

weight : 86

キモイトカゲに踏み潰された、気の毒な人。

白騎○物語。

幹部クラスだが、あえて名前を付けない。

特に意味はない。

蒼き右腕

(ヒューマン?)

age : 18

height : 178

weight : 66

地下闘技場のルーキー。

流派もなにもない、我流の格闘でここまでのしあがったらしい。

元はイルミナスの少年工作員だったが、壊滅後、今の仕事に流れてきた。

過去に警察組織の人間を10人ほど手にかけている。

スゴいんだかスゴくないんだか、微妙である。

キャラクター紹介（後書き）

ここまでのキャラの紹介は以上です。

最後に付き合ってください。みなさまに一言。

Gracias por todo .

Se lo agradezco de corazon .

（日本語しゃべれ）

なお感想、アドバイス、誹謗中傷、人生相談、随時受け付けております。

9 違法営業（前書き）

キャスケットの意外な特技が明らかになります。
そして新たな属性も（笑）

しかし浪人生だったのに、こんな更新して大丈夫か？

大丈夫だ。問題しかない。

9 違法営業

地下街が襲撃されてから一ヶ月。

アスランは拠点をバラスシティの金融事務所に移していた。デスパレード再会のためは、まだ立っていない。

「土地がないよね」

暑さに顔をしかめ、アイスバーをくわえながらキャスケットが言った。

「警察や軍に気付かれず、なおかつSEED汚染の被害が少ないところ」

「それよりも切実な問題が一つ」
ランディはソファに寄りかかって、うめくように言った。

「金だ。資金援助がなけりゃ、開けない」

「本末転倒じゃないか。活動資金が欲しいからデスパレード開きたいのに」

「公に援助を募集したら、すぐ警察組織がかぎつけてくるしな」
ランディは腕を組んだ。

「諦めて、タイラーの軍門に下るか…」

「それはマズイよ」

少年はふるふると首を横にふる。

「うちのボスは、タイラーだけは気に入らないって豪語してるんだって」

「おれはあの男の生きざま、結構好きだけどな」

「偽善者じみてるのがキライらしいよ」

「じゃあ、どうするっ?」

「うーん……」

キヤスケットもランディのマネをして腕組みしたが、不意に指を弾いた。

「わかった」

「なにか思いついたのか?」

ランディの問いに少年は頷く。

「『ゼブルス』のシマのローグ스에援助してもらおう!」

「なに?」

ランディは目を丸くする。

「正気か? 同じ独立派とはいえ、いつ潰しに来るか分からない敵対勢力だぞ」

「株式だよ」

キャスケットは得意気だ。

「向こうだって闘技場の儲けは知ってるからね。最近景気がいいみたいだし、喜んで飛び付くよ」

「驚きだな」

ランディは静かに頷く。

「いい手かもしれん…」

「でしょ?」

喜ぶキャスケット。

しかしランディの表情は冴えない。

「いい手だとは思うが、そんなに上手くいくか?」

「なんとか考えとくよ」

キャスケットは大儀そうに首をならした。

「上手くいくような手をね」

「頭のキズは、キレイに治ってるよ」

青年の頭の包帯をとりながら、リエラはにっこり笑って言った。

「これで大丈夫ね」

青い髪の青年はリエラをいちべつする。

「…あなたはすっかり、ローグスどもの看護師だな」

「えっ？」

きよとんとするリエラ。

「おれもこの世界に身を置くものとして言わせてもらっけど」

彼はため息を吐いて言う。

「今なら間に合うから、とっとと逃げな」

「そんな…」

リエラは目を丸くする。

「ここの人たち、いい人が多いのに」

「弱いやつから金巻き上げる奴らが、いいやつらか？」

青年の言葉に、彼女は言葉に詰まった。

「でも…わたしに優しくしてくれて…」

「それはあんたが人質だからだよ」

青年の言葉に、リエラは悲しそうに口をつぐむ。沈黙が続いたあと、彼はリエラと目を合わせた。

「あんたは素直で優しいからさ」

青年の目には、複雑な感情が浮かんでいる。

「ここにおいて、汚れてほしくないんだ」

「あなたも優しいのね。」

「…どうだか」

「ありがとう」

リエラは乾いた笑顔を見せる。

「でもわたし、あなたが思ってるほど、恵まれてないの」

「…?」

「ずっと居場所がなかったから」

彼女は窓の外から、ずっと遠くを見た。

「だから、わたしに気兼ねなく接してくれるここは、気持ちいいの」

事務所のとある部屋の前で、ローグスたちが列をなしていた。

「おい、まだか？」

「あいつ、随分時間かかってるな」

男たちが扉の前で騒ぎ始めたとき、突然扉が音を立てて開いた。部屋から出てきた男は、無言で彼らの前に立つ。

「…どうなった？」

誰かが男にそう問うと、彼はにやりと笑って二の腕の袖をめくる。そこには十字架に巻き付く、鮮やかな龍のタトゥーが刻まれていた。

「どうだ！」

「おお！かつけえ！」

「ちよつとベタすぎねえか？」

その部屋のなかでは、バンダナを巻いた少年がニードルを握り、男の背中にタトゥーを彫りつけていた。

半分ほど彫られたそれは、鎖を巻き付けられた裸の女性の絵だった。

「痛いけど、我慢してよ」

「ぐっ…！」

台の上でうつ伏せに寝ているハスキーが悲鳴をあげる。

「いてえよ〜死んぢやうよ〜！」

「体動かさないでよ」

バンドナの少年は集中してニードルを握り、ペイントに沿って丹念に穴を空けていく。

「動いたら殺すよ」

「どっちにしろ死ぬのかよ〜！」

ハスキーは泣きながら訴える。

「もう止めれ〜！」

「あんたが彫れって言ったから彫ってるんだよ？」

「後生だ〜！」

「つたく…！」

少年は呆れ顔でニードルを置いた。

「しょうがないな。今日はとりあえずこれだけにしとくよ」

「お〜ありがたやありがたや〜！」

ハスキーは背中をかばいながらゆっくり台から降りて、鏡の前に立つ。

そして歓声をあげた。

「うへへへ！裸の女が鎖巻いてんじゃない？ウケる〜！」

「エロいの彫れって言ったのあんただよ？」

怒ったような表情を浮かべながらバンドナを外すキャスケット。

「いや、スゲーよ！スゲーとは思っただけど…！」

ハスキーは自身の引き締まった背中をもう一度見て、爆笑した。

「お前、女の裸体描くの上手すぎだろ？！ムツツリか！」

「う、うるさいな！」

「毎夜、自分で描いたエロ絵で〇いてんじゃないか？ははははは！キモッ！」

「もう帰れ！次がいるんだから！」

怒鳴り声をあげたキャスケットの方を向いたハスキーは、再び爆笑した。

眉を潜めるキャスケット。

「…なに？」

「お前の耳！耳！ネコ耳！いつ見てもぷぷはははは！」

キャスケットの耳はネコの耳で目立つため、いつも帽子などで隠していた。

仲間うちでからかわれることが多いためである。

「こいつう…！」

顔を真っ赤にしたキャスケットは、肩をいからせニードルを手にとった。

「蜂の巣にしてやる！」

「ヒヤツハア〜！怒った怒った！ミケちゃんが怒ったぞ〜！」

手を叩いて喜ぶハスキー。

たいへん大人げない。

ちよつどそのとき、扉が開いて長身の男が現れる。

煙草をくわえたアスランだった。

「おい、キャスケット」

アスランはひよこひよこ跳び跳ねているハスキーを突き飛ばすと、無表情に彼を見た。

「ちよつといいか？お前に客が来てる」

10 兄貴

安っぽいタイルアートの床に、埃の積もった照明。

「ネザル先輩が来たって？」

古ぼけた事務所の廊下を歩く二人。

アスランの話を聞いたキャスケットは、目を丸くする。

「マジ？久しぶりだね」

「ああ」

アスランは無造作に、煙草を床に投げ捨て、踏み消す。
明るいキャスケットとは裏腹に、彼の表情は無機質だった。

「嬉しそうだな」

「当たり前じゃん。僕たちにとって兄貴みたいな人だもん。あんなは嬉しくないの？」

「がっかりすんなよ」

「え？」

聞きなおしたキャスケットに、アスランは黙って頭を掻く。

「…いや、何でもねえ」

「あつそ」

アスランの後ろ姿を見送りながら、キャスケットは顔をしかめた。

「変なやつ…」

ネザルは、元々この辺りのチンピラをやっていた男で、SEED事変以降、『ゼクシード・ゼブルス』のシマの3割を治める幹部だ。ちなみにゼブルスは独立派の一人。6人のなかでは確実に頭一つ分抜きでた男だ。

キャスケットは彼にある期待をしていた。
デスパレードの資金援助。

兄貴分に久しぶりに会えるのと、株主が見つかるのと。

「一石二鳥ってやつかな」

キャスケットはそう独り言を言いながら扉を開ける。

そこで彼が見たのは、男に殴られ、床に崩れる女性の姿だった。

「今更なにびびってんだよ…?」

男は冷徹な目で、静かに女性を見下ろす。

キャスケットは驚きの目で彼らを見ていた。

男は部屋に入ってきた彼に気付くと、顔をほころばせる。

「おお、キャスケット！久しぶりじゃねえか！」

「お前に頼みたいことがあるんだがよ」

「頼みたいこと？」

「おめえにしか頼めねえ… ってわけじゃねえんだが…」

灰色のスーツに紫のガウンコートの肩幅の広い男、ネザルは、指輪をした指でキャスケットの額を軽くついた。
少年は額を押さえ、顔をしかめる。

「やめてよ。もうガキじゃないんだから」

「ハハッ、ガキじゃないって？」

キャスケットの言葉に、苦笑いを浮かべるネザル。

「なら、ガキじゃねえお前に仕事でも頼むかな」

「タトウー？」

「そうさ」

ネザルは突然上着を脱ぎ、スーツもシャツも脱いで上半身裸になる。筋骨逞しい背中一面に、『アルテラツゴウグ』をモチーフにした和彫りが彫られていた。

「…生憎だけども」

呆れた様子のキャスケット。

「僕は男の裸には興味がないよ」

「んなことあ分かってる」

男は肩をすくめ、自分の背中を指さした。

「こいつと同じもんを彫ってもらいたい。こいつにな」

ネザルが指差すのは、彼の隣に無表情に座っている女性だった。彼女のことも、キャスケットは昔から知っている。

「もう結婚するって聞いたけど…」

キャスケットの呟きに、ネザルは豪快に笑った。

「ガハハハ！そう！それで俺と同じタトゥーを彫らせようと思っ
てな！記念だ」

「そっか」

少年は女性を横目に、ぎこちない笑顔を浮かべた。

「おめでとう」

確かに見た。あの兄貴が。

キャスケットの視線は、女性の腫れあがった頬に釘付けになっていた。

あの兄貴が、女に手をあげた。

しばらくして、ネザルは恋人をキャスケットのところに置いて帰ってしまった。

彼のタトゥーを彫る部屋には『本日休業』のメッセージボードが張られている。

そのなかで、キャスケットとネザルの恋人は向かい合っていた。

長い沈黙のあと、先に口を開いたのは女性だった。

「…ねえ」

「なに？」

彼女の表情は暗い。

「タトゥーって、やっぱり痛い？」

「…」

キャスケットはしばらく黙る。

「…痛いよ」

「そう」

「なかには痛くないって人もいるけど」

彼は帽子を被りなおし、顔をそむける。

「キズにインクぶちこむんだから、やっぱりすごく痛いよ」

「そうよね」

彼女はそう言ってうつむいていたが、意を決したかのように顔をあげる。

「わかったわ」

そう言うが早いか、彼女はコートを脱ぎ捨て、シャツも脱ごうと手をかけた。

「わわっ！ストップ、ストップ！」

下着にまで手をかける女性を見ないように目を手で覆いながら、キヤスケットは叫び声をあげる。

「まず服着て！それからほっぺの怪我見なきゃ」

「え…」

女性は目をぱちくりさせた。

「彫らないの？」

「今日はどっちにしても彫らない！」

ソファに顔を突っ伏したまま、わめく少年。

「下準備とかあるし。だから服を着なさい！」

彼らの部屋にやってきたリエラは、さっそく彼女の頬を見始めた。

「そう」

女性はぼんやりとキャスケットを見た。

「あいつの和彫りは、あんたが彫ったのね」

「…うん」

キャスケットはそう返し、リエラの方をちらちら見る。

「聞かせてくれないかな。兄貴がどうして、あんたにタトゥーを入れたいのか。…差し支えなければ」

彼は部外者であるリエラに聞かれることを気にしていたが、彼女は首を横にふる。

「構わないわ。誰に聞かれたって、今更恥ずかしいなんて思わない」

「…そう」

「と言っても、あたしにもよく分からないの」

肩をすくめ、淡々と語る彼女。

「あいつ、昔とすっかり変わっちゃった。あんたたちと一緒にいた頃は、あたしに手はあげなかったのに」

彼女は無表情にうつむく。

そこにあるべき悲しみは、もうすっかり枯れてしまったようだった。

「欲張りになったわ。何でも自分の思い通りにならないと、気がすまないみたい」

「…タトウーのことも？」

「そうよ」

キヤスケットの問いに、彼女はうなずく。

「わたしが自分のものっていう、確認が欲しいみたい。わたしの前でも、いつも何かに怯えてて…」

「…」

「ふふっ」

少年少女が沈黙に包まれたのを見て、彼女は小さく笑った。

「坊やたちに話しても、しょうのないことだったわね」

「あなたにタトゥーは彫らない」

「えっ？」

口に手を当てて驚く女性に、キャスケットは紙幣を差し出す。

「お金は返すよ」

「でも…」

「心配しないで」

彼は不敵に笑って見せた。

「ネザルには、僕から言ってみるから」

「キャスケット…」

女性は心配そうな表情で、キャスケットの腕に触れる。

「あいつ、おっかないよ」

「なんとかするさ」

彼はそう言って表情を引き締めると、さっと椅子から立ち上がった。

「兄貴は、いつもどこで飲んでるの？」

基本用語辞典(2) (前書き)

用語辞典です。

独立流のドンたちの紹介も載せています。

別に既存のキャラが嫌いなのわけではないんです。

ただ、出すタイミングがなかなか…

基本用語辞典(2)

『ナノトランサー』

ドラ もんのポケットみたいなもの。

エミリアやルミアは太ももや腕、ヒューガは背中、ナギサはあちこちに起動装置が付いているのが確認できる。

…円盤みたいなアレ、起動装置ですよね…？

『フォトン』

大気中に存在し、エネルギーとして利用できる物質。

そんなもんあつたら苦労しないです、人類は。

『SEED』

生物に寄生して遺伝子レベルでの変成を行い、なんだかよく分からない生き物に変えてしまう寄生生命体。

ヒトにも感染する。

『SEED事変』

「SEEDってヒトには感染しないよね。…え、感染すんの？マジかよやっべー」という一連の忌まわしい事件。

始めは病原菌騒ぎだったのが、テロリストやら怪しい宗教やらが暴走し、しまいには暗黒神『ダークファルス』という意味不明なラスボスが現れる始末。

この一連の事件を収束させた英雄とシナリオライターに盛大な拍手

を。

『ダークファルス』

『悪意の集合体』と言われる存在。SEEDの親玉。
シルエットは魚の骨に近い。

一見知能は無さそうに見えるが、戦うときよく聞くと「我 全てを
…超越せし者…」って言ってる。
なんかカツコイイ。ホネのくせに。

『亜空間事件』

みんな大好きフハハーン。
シズルの素敵な笑顔。

『タイムマン』

一対一の喧嘩のこと。
メンチ、タンカを切って始めるのが礼儀。

『バ〇ブ』

サイズは様々。
意外にもヨーロッパで生産が盛んらしい。
映画などではチェインソーを改造したブツがあったりするが、実在
するかどうかは不明。

裏社会では、自分のブツの内部にこれを埋め込むという手術が流行
っていたこともある。

『ナノブラスト』

ビーストと呼ばれる種族が使える特殊能力。
大きな獣人に変身し、暴れまわれる。

見た目はモン○ンのラー○ヤンに近い。
稀に暴走すると、黒い姿になる。

『マガシ』

過去に何度も英雄と渡り合ったとされる漢。
悪の組織、イルミナスの元幹部。キャストの若本。

「ぶるああああ！」と巻き舌で剣を振るい、「じえええい！」と
叫びながら回転して何処かに飛んでいく。
倒したときの断末魔もやかましい。
しかし仲間にするとかかなり強い。

『ローグス独立派』

ドン・タイラーから独立した6人の首領たちの5つのファミリー。
うんざりすることに、全員オリジナルキャラクターである。
彼らのシマ全て合わせてもタイラーのシマの半分にも満たないため、
文字通りシノギを削っている。
ここでは大まかに紹介する。

ドン・アスラン

…最もザコと言われる人物。
予算不足で海賊船を買えず、大規模な活動を行えないのもその所以。
けっこうチマチマした性格。

ドン・ゼブルス

… 本名ゼクシード・ゼブルス。

デッドルーム・ゼブルスという異名がある。

アステロイド（小惑星群）にカジノを所有している。

ドン・ラサード

… 本名イブン＝ラサード。

広大な砂漠地帯をシマに治め、資源市場の独占をはかる。
ある理由があり、警察組織は彼にうかつに手を出せない。

ドン・ウエリントン

… ニューマンのローグス。

本名リヒター・ウエリントン。

頭脳派で、滅多に表に出ることがないため、人相すら知られていない。
い。

何故か教団に追われている。

ドン・エスパダ

… パルム系ローグスのドン。

屈指の武闘派で、タイラーに下克上を掲げている。

性的犯罪行為を全く行わないことから、女性説が有力。

ドン・ブラコ & amp; ドン・ブラッコ

… 『ガーディアンズ26人殺し』で有名な悪名高き兄弟。

犯罪行為において、彼らの右に出るものはいない。

同盟軍はおるか、ガーディアンズまで意欲的に殲滅戦線を展開している。

桃は流れてこない。

以上の6人。

『絵をかく』

ヤクザがシノギを発展させるために行う工作活動。

『シノギ』

金を稼ぐための確かなスジを作ること。

主にカタギから絞り取る。

皆さんも気を付けましょう。

『ヤオロズ』

よろしい。

『ガーディアンズ』

…太陽系最大の民間警察組織。

シリーズ通してなにかと苦労している。

女子の制服かわいい。

男子の制服なんか変。

『ネコ耳』

禁断の境地。

決して踏み入ることがあつてはならない。

男は特に。

『SHADOW KINGS』

タイトルだけは威勢のいい、謎のチンピラ小説。
これのどこがpspro2iの二次創作なのだろう。

説明描写が少なく、やたら展開が早いのが特徴。
読みにくい。

気付いておられる方もいると思うが、筆者はヤンキー漫画が好きである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8732x/>

SHADOW KINGS ~ pspo2i

2011年11月24日01時45分発行